Point

ＪＲ東海労　大阪修繕車両所分会分会情報
Ｎｏ．１１３　２０１１．０６．０１．
発行責任者　坂東　貞男
編集責任者　教　宣　部

やはりメルトダウン！

東日本大震災から3か月近く経ちましたが、福島第一原発は、依然として厳しい状況が続いています。最近になりようやく、政府・東電等が、この原発事故の初期段階でわかっていた情報・事実などを小出しに公表し、メルトダウンなど事故の深刻さがより明らかになってきました。

また、事故当初からマスコミ等で、この事故に対して楽観的な発言を繰り返してきた原子力専門家と言われる人たちの発言が、信用できないものであることもはっきりしてきました。（マスコミ等で楽観的な発言をしていた原子力専門家は、電力会社の御用学者ばかりという話もあったので当然ですが！？）

一方、日本の舵を取る国会・多くの政治家や原子力安全委員会・保安院などは原発事故について「想定外・想定内」「言った、言わぬ」「伝えた・聞いていない」等々のまったく非建設的なやり取りで時間を浪費し、「天災」か「人災」かで変わる利己的な思惑だけで動いているように見えます。

「天災」か、「人災」か、は後に検証すればいいことであって、多くの被災者・避難者の人たちにとっては、大震災前の日々の生活に戻る・近づくことが一番大事なことのはずです。現在の状況はとても被災者・避難者のことを考えた状況となっておらず、日本人としてとても情けない思いがします。

浜岡原発だけでなく、全原発が津波・耐震対策を完全に出来るまで停止せよ！

原発事故について「天災・人災」「想定外・想定内」等々の検証を行うことは大事なことでしょうが、阪神大震災以降、地震の活動期に入ったと言われている日本では、現在も多くの原発が運転中であり、検証をしている余裕はありません。

天災だろうと、人災だろうと、想定外だろうとなかろうと、二度と福島第一原発事故のような大惨事を繰り返さないことが大事なことではないでしょうか。

福島第一原発の場合は、津波対策として、高さ5.7mの防潮堤が設置されていたそうですが、現実は高さ14～15mの津波に呑み込まれてしまいました。

つまり、国や東電が津波の想定として、高さ5.7mの防潮堤で大丈夫としていたのに、その3倍にも及ぶ高さの津波に呑み込まれたわけです。

この事実から大自然の驚異に対して常に謙虚であるべきで、各原発で立地条件など、様々な事情はあるでしょうが、最低でも現在想定されている津波の高さの3倍の津波が発生することを考えた対策を立て、実行するべきだと思います。また、地震の揺れに対しても更なる強化が必要なことは、2007年の新潟県中越沖地震（M6.8）によって東電・柏崎刈谷原発に大きな被害があったことでも明らかであり、更なる耐震強化を合わせて実施しなければならないことは当然のことです。

これらの津波・耐震対策を行うには莫大な費用がかかることは容易に予想できますが、絶対に事故を起こしてはならない原発として当然実施するべきです。

そして、実施できるまでは原発の運転を停止させるべきで、実施できないのなら原発を廃止するべきです。

ちなみに浜岡原発は、東海地震の発生確率が向こう30年で87％と予想されていて、今回、全面停止することになりましたが、地震の活動期に入った日本ではいつどこで大地震が起きようと不思議ではない状況と言えます。

明日の日本のためにも原発問題を考え、行動しましょう！！